



Title	未科学的 - 科学的なることと非科学的なることの分離の終わり -
Author(s)	保延, 光一
Citation	北海道大学大学院教育学研究紀要, 100: 25-28
Issue Date	2007-01-31
DOI	10.14943/b.edu.100.25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/18862
Type	bulletin
File Information	100_25-28.pdf



[Instructions for use](#)

未科学的

——科学的なることと非科学的なることの分離の終わり——

保 延 光 一*

Pre-Scientific: The End of Dividing Scientific and Unscientific

Kouichi HONOBE

【キーワード】 盆踊り, ディープ・エコロジー, トランス・パーソナル

産業革命以来の機械文明の発展は今日に至って高度な経済発展をもたらしたことは疑うべくもない。一方でそのことによる社会の弊害、ひずみは既に数多く指摘されているところである。環境破壊、自然破壊、資源・エネルギーの枯渇の問題や都市一極集中による過密化、もう他方での地方の過疎化などの社会問題もある。それらの問題は現在では先進諸国の国内問題の域を越え、全地球規模の問題にまで拡大している。それが地球温暖化やオゾンホールの問題などである。その解決のため京都議定書が締結され発効し、世界的な取り組みが始まっているところである。我が国においても2012年までに温室効果ガスを1990年基準で6%削減する義務が課され、化石エネルギーから生物循環型エネルギーへの転換、代替エネルギーの開発が進んでいる。ところが、これは戦後の高度経済成長期あるいは明治期の近代化以前のエネルギー資源に再び目を向けるきっかけになった。かつては薪や間伐材などの木材が燃料として利用された。家の近くには里山と呼ばれる森があり、そこが生活の糧を得るための豊かな恵みの場であった。また、農家では養蚕の時期になると桑を育て、生糸の出荷が終わると桑の枝を刈り取って、それが1年分の燃料となった。それで炊事や風呂炊きを行なった。したがって、養蚕で飼育する蚕の数はその家で1年間に使用する燃料が得られる桑の量で育てられる数とはほぼ一致するものであった。そのように人の生活は自然と一体であった。そして、自然から得られる恵みは再生産可能なものであり、廃棄物は少なく、再利用されるものが多かった。しかしながら、経済発展の中でそのような生活様式は大きく変貌した。経済的な意味で発展するためには、大きな市場が必要であり、市民生活が市場の中に取り込まれる必要があった。それまで再利用されていたものは廃棄され、新たに別のものを購入する必要があった。間伐材や桑の枝は費用を掛けて処分され、その上でさらに費用を掛けてガスや石油などの燃料を購入する生活となった。人や家畜の排泄物は畑の肥料としては利用されなくなり、生ゴミも家畜の飼料でなくなった。つまり、循環のサイクルは寸断され、金銭を媒介とする取り引きに変わったのである。そのことによって社会の経済規模は拡大し、結果として人々の現金収入を増大させることとなった。それ

* 北海道大学大学院教育学研究科健康スポーツ科学講座助教授（身体運動科学研究グループ）

は一面では歓迎されることであった。金銭を媒介とすることによって様々な工業製品を購入できる。電化製品や自動車、洋服などを手に入れ、電気、水道、電話などの生活インフラを利用でき、旅行や様々な娯楽に興じることも可能となった。さらに、就学や医療を受けることも容易となった。ただ、それは一方で自然と人間との関わりを希薄にさせることにもなった。そこから一時、自然は人間にとって不要なもの、開発される対象との見方が広まった。そして、自然保護を唱える言説は経済発展の妨げであるかのような風潮も存在した。今日的危機に直面して極端な開発至上主義は影を潜めたものの、経済発展の方向性やライフスタイルは基本的に変化する兆候はない。それは、もちろん便利で快適な生活を多くの人が望んでいることが否めない事実であるし、それを否定することは商業的な否定にも繋がるからである。しかし、それだけではない理由もある。戦後の経済発展に連動するように生活圏の衛生状態は大きく改善していった。かつては伝染病や寄生虫に人々は悩まされた。それが原因で若年で亡くなる人も多かった。戦時中までは新生児死亡率も高く、それが平均寿命を押し下げる要因でもあった。そして、人々は常に死の不安や恐怖と隣り合わせて生きていた。家族や親しい人が亡くなる不安にも常に晒されていた。実際、親や兄弟、子どもが若くして亡くなることも珍しいことではなかった。今日でもそのような不幸は無くなったわけではないが、かつては社会全体の必然として置かれている境遇であった。そのような日々の生活の中で人々はどのように生きて来たのであろうか。神に祈り、徳を積み、恐怖や悲しみを昇華させる様々な知恵があった。

盆踊りの風習は今日でも全国各地にあり、夏の風物詩として盛んに行われてはいる。しかし、ほとんどは昭和以降の手踊りと言われる簡素な形式で宗教色もなく、地域の娯楽のひとつとして行われるものであり、江戸期以前の原型を留めているものは数少なくなっている。元々盆踊りは中国南東部の歌垣に起源を持つとする説やイスラエルの民族舞踊との類似点を指摘する説、盆の風習が中央アジアのウルバンからウラボンエとなったとする説などがあるが、それらとの共通性は専門家による研究に待たなければならないところである。しかしながら、盆踊りの原型となる風習は仏教のような大陸文化の伝来以前から日本にあったと言われている。長野県阿南町に伝承されている新野の盆踊りには神送りの儀式があり、これは神道の形式を持ち、仏教と習合する以前の形態を留めているものとして貴重な無形文化財となっている。そのように土着の風習と外来の風習が習合した形が盆踊りになっていったと考えられている。盆踊りに繋がる風習を見ていくと、空也上人が始めたと言われる踊り念仏ややこ踊りが挙げられる。踊り念仏が念仏踊りに変遷していくと、庶民の娯楽の要素が強くなっていったようだが、念仏踊りや初期の盆踊りは本来死者の供養の意味合いを持っていた。何人かのグループが新盆を迎える家に赴き、家の前で輪を作って踊ったそうである。その家の人は踊り手を御馳走でもてなした。盆には死者が家に帰って来るという考え方があがるが、頬被りをして人相を隠し、死者の生き返った姿に扮した人がその物語を演じたのである。家人の悲しみの気持ちはそのことで救われた。たとえそれが赤の他人であるということがわかっていようとも、家人も踊り手共々気持ちをその演技の中に入り込ませることで死者との再会の時を過ごすことが出来た。今日的に言えば、「死者の魂なんて存在しない」、「死者が生き返って来るなんてありえない」と切り捨てられてしまう話に違いない。科学的に論じれば確かにその通りであろう。しかし、そのような言説は何らの意味も価値も持ちえない。科学的正当性は全く力を失っている。当然、科学は人間の意志とは無関係に生じる自然現象を記述するところから発生している。それは特定の権力者や支配者の政治的意図によって世界、すなわち神の創造物が語られることから自由になるために必要で

あった。そのことが現代では逆に人間が物質、機械中心の文明の中に埋没しようとしている。本来人間が自らの身体を使ってなしていたことは悉く機械が成り代わってやってくれるようになった。コンピュータの進歩は知的な作業の部分も代役してくれるようになった。そのことは一時は人間を過酷な労働から解放する成果を与えてくれた。しかし、現在に至っては機械に人間が翻弄されるかのような社会である。自動車や飛行機、新幹線は確かに遠方まですばやく人を運んでくれる。しかし、速い移動が時間の余裕を作り出しているかと言えば、そうではない。余った時間はまた労働の方に費やされる。今まで見聞するのが難しかった遠方にも行けるようにはなったが、そこはかつてのような特色ある文化圏ではなくなっていた。人も物も行き来しやすくなれば、地域間の画一化が進み、どの地域も代わり映えない世界となってしまう。地域文化の消失も進んだ。さらに深刻なのは、家電製品による家事労働負担の軽減や労働現場の機械化、OA化によって人間の創造性が喪失したことである。機械の操作はデジタル化が進み、マニュアルさえ覚えれば誰でも同じ仕事をさせることが出来る。人間の創意工夫や永年の経験や勘は必要とされなくなった。人間の平等化の手段が人間から人間性を奪い取り、単なる肉体という欲望の塊に変質して行こうとしているかのようである。ここで思い起こさなければならないことは、現代科学は人間から切り離された自然現象の秩序を法則化したことに基づいているということである。この科学を基礎として現代機械文明は発展し、そして人間をも取り込もうとしている。それは科学が予定していたことではなかったはずなのである。自然が神の創造物であるならば、人間も神の創造物であるはずである。人間以外の生き物もそうである。デカルト的懐疑に方法論の出発点を求めるならば、現代機械文明こそ懐疑の対象となるべきものである。人間や生命の秩序をかつて自然現象を見つめたようなピュアな目で見つめ直して見る必要があろう。盆踊りの事例はそれを予感させる。輪になって踊る踊り手には明確な意図はない。ただ踊りたいだけでも構わないし、あるいは、酒や御馳走にありつきただけかもしれない。それとてもありつけるかどうかは全くわからない。そして、それを観察し、物語を想起し、意味付けるのは家人であり、そこに普遍性はない。家人の置かれている状況、感覚、生い立ち、その他、全く家人の個人的な要因に依るのである。踊り手と家人という二つの全く異なる自己がコミュニケーションを取り、盆踊りが創出される。それがさらに普遍的な価値を持ち、文化として広まった。これは現代科学発生のプロセスとは根本的に異なる。一神教的思考、すなわち、唯一神あるいはコギトを出発点とした唯一の一人称として定位される自己ではなく、複数の自己の同時存在を前提としている。そして、その自己は欲望の塊である肉体ではなく、畏れや恥や慈しみの心を持った身体としての自己である。であるからこそ、コミュニケーションという命あるものの営みの力を持っているのである。

かつて、日本その他の民族には、アニミズムやトテミズムの思想があった。しかしそれは、高度経済成長の妨げと見做された。大量消費、大量廃棄を前提とした工業の発展は、莫大な金銭的富と便利さをもたらした。そこに目を奪われて見落とされたものは他者の他者にとっての自己であった。自分以外のものに自己を認めると、廃棄することは自己の否定以外の何者でもなくなる。したがって、廃棄されるものとされないものに分ける必要があった。廃棄されるものは自己以外のものであり、それを最大限拡大することが経済的利益に繋がった。必然的にアニミズム、トテミズムのような自己同一性、自己拡大を唱える思想は否定されていった。そして、他者に対する慈しみや畏れや物を大事にする心は失われていき、古いものは捨て去られ、新しいものが重宝されるようになった。しかし、新しいものも時が経てば古くなる。結果、自

分の周りには廃棄される必然的運命を備えたものばかりとなり、すなわち、ゴミとなることが予定されているものばかりとなり、自分と自己同一化不可能なものばかりとなり、コミュニケーション不能な対象となり、孤独となった。最早そうになった自分は全面的に自由である。自分を煩らわせるものは何もない。煩わしければ捨てればいいだけである。ここに科学の当初の目的は完遂したのである。

ところが、人間とは飽くなき贅沢なものである。これほど多くの年月を掛け、多くの血と涙を流した末に自由を手に入れてみると、それは幸福とは別のものであることに気がついた。現代科学がもたらした果実を放棄することが出来ない中で、未来に向けた科学の模索が始まっている。ディープ・エコロジーという概念がある。人間中心のエゴイスティックなシャロー・エコロジーに対するアンチテーゼという性格を持つ。人間以外の生命全体に人間と対等な存在価値を認める哲学であり、トメイズムの復権に繋がるであろうと考えられる思想である。そこでは、全ての生命が平等の自己を認められ、同一の価値を持つ。それは、経済的利益追及、利便性追及の考え方からは全く出て来ないものである。しかし、幸福追及の視点で見るとそれは大きな可能性を秘めた哲学であるだろう。ディープ・エコロジーの考え方をトランスパーソナル・エコロジーとして解釈した論述もある。これは哲学の域を越え、他の実践的な学問分野にまで可能性を広め得る考え方であると思う。人間以外の生命圏全体をも包含する社会システムをデザインして行かなければならない。そのための学問が今後追及されて行かなければならないであろう。自己主義であって、利己主義でない、個人の自由を基本としつつも、その先にある人々の幸福とは何であるかを問い直さなければならぬ時代である。そのために科学・学問が果たせる役割が今求められている時であろう。

[参考文献]

- ・小寺融吉 (1941) 郷土舞踊と盆踊 桃蹊書房
- ・村上陽一郎 (1976) 近代科学と聖俗革命 新曜社
- ・ワーウィック・フォックス (1994) トランスパーソナル・エコロジー—環境主義を越えて— 星川淳訳 平凡社
- ・アルネ・ネス (1997) ディープ・エコロジーとは何か—エコロジー・共同体・ライフスタイル— 斎藤直輔, 開龍美訳 文化書房博文社
- ・五木重 (1998) 踊り念仏 平凡社
- ・リン・ホワイト (1999) 機械と神—生態学的危機の歴史的根源— 青木靖三訳 みすず書房
- ・折口信夫 (2002) 古代研究—祭りの発生 中央公論新社
- ・折口信夫 (2002) 古代研究—祝詞の発生 中央公論新社